

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 橋本 哲

論 文 題 目

ウィトゲンシュタインの後期哲学についての研究 ― 確実性について ―

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	田村 均
委員	名古屋大学教授	金山弥平
委員	名古屋大学教授	宮原 勇
委員	名古屋大学准教授	安川晴基

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文は、ウィトゲンシュタイン（1889～1951）の最晩年の思索を伝える『確実性の問題』（*On Certainty*）を取り上げて、そこで考察された「確実さ」がどのような内実をもつのかを解明しようとするものである。

第1章は、議論の準備として、『青色本』（1933-34年執筆）以降のウィトゲンシュタインの後期哲学を、前期の『論理哲学論考』と簡潔に対比しつつ、後期に特徴的ないくつかの用語に沿って解説する。取り上げられるのは、「文法」、「言語ゲーム」、「真なる命題」、「無意味な命題」、「ナンセンスな命題」等である。

第2章は、G・E・ムーアの「常識の擁護（1925）」および「外的世界の証明（1939）」の2論文に対するウィトゲンシュタインの理解を、A・ストロールの解釈を通じて確認する。ウィトゲンシュタインの理解では、ムーアは懐疑論の無効さを示そうとしたが、それが一個のナンセンスであると認識するまでには到らなかったのである。

第3章は、「私は～を知っている」という日常的な知識主張が示している認知的状態と、「確実さ」ないし「揺るぎないもの」を認知している状態とが、ウィトゲンシュタインによってどのように区別されたのかを明らかにする。「私には手が二つある」といった「揺るぎないもの」を認知している状態は、「私は～を知っている」という個別の主張からなる通常の言語ゲームに基礎を与えている。言語ゲームのこの二層の構造が「揺るぎないもの」の確実さを解明する手がかりとなる。

第4章は、M・マッギン、D・モヤルーシャロック、A・ハミルトンという三人のウィトゲンシュタイン解釈を比較対照し、彼らが「揺るぎないもの」をどう解釈したのかを検討する。マッギンは、「揺るぎないもの」を我々の実践の枠組みであると解し、シャロックは探究の規則ないしウィトゲンシュタイン的な意味での文法規則の表現であると解し、ハミルトンは実践や言語ゲームの前提を表現すると解した。

第5章は、「揺るぎないもの」の確実さに関する論者自身の見解を述べる。「私には手が二つある」といった命題は、例えば単独で科学実験を行う際、手が同時に三つ必要になる操作は最初から考慮しないというように、我々の思考の大枠として「特有の論理的役割」を果たしている。こうして「揺るぎないもの」は思考全体の基礎を成す。かくして、思考全体の大枠を疑う懐疑論の思考は、自己論駁に陥らざるをえない。「揺るぎないもの」の確実さは、この自己論駁の不合理性に根ざしている。

第6章は、ウィトゲンシュタインとヒュームとをよく似た自然主義の哲学とみなすP・F・ストローソンの解釈を、不十分な理解として批判する。ヒュームは、「揺るぎないもの」を疑うことが言語ゲームの二層の構造によって自己論駁的な思考となることに気づいてはいなかったのである。

第7章は、ストロール、マッギン、シャロック、ハミルトン、ストローソンの5人の見解と論者の見解を対比しつつ論点を列挙してまとめる。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

本論文は、外的対象はそもそも存在するのか、という伝統的な哲学的懐疑論に対して、ウィトゲンシュタインがどのように解答したのかを明らかにしようとするものである。晩年のウィトゲンシュタインは、G・E・ムーアの論文を批判的に検討しつつ、それまでの懐疑論論駁とは異なる論法を提示した。この事実は 20 世紀中盤の哲学史上の画期をなすと言ってよい。本論文は、この重要な問題の解明に取り組み、複数の解釈を比較検討しつつ、論者自身の解釈を提示した力作である。

本論文に対して第一に評価できる点は、『確実性の問題』をはじめとしてウィトゲンシュタインの後期著作群を幅広く検討し、その懐疑論論駁のあり方を的確にとらえた点である。ウィトゲンシュタインの後期著作群は、没後に残された多数の断片を編者が編纂したものである。それゆえ一貫した主張を取り出すことは容易ではなく、論点の再構成には注意を要する。論者はそれらを詳細に検討して、断片群の錯綜した論点に一定の筋道を見出した。従来 of 解釈者によれば、ウィトゲンシュタインは、思考及び言語運用の一定の社会的習慣付けの過程が、我々の思考全体の基盤として存在すると考えたのであり、この基盤的過程が彼の言う確実性の実質であると説明されてきた。これに加えて、本論文は、思考全体の基盤を疑う思考は一個の自己論駁を構成するため、論理的に成立しえない、という論理的な内実が、ウィトゲンシュタインの懐疑論論駁として重要であると指摘する。全面的懐疑が自己論駁に陥るという指摘自体は必ずしも新しい主張ではないが、これをウィトゲンシュタイン固有の言語ゲームの二層の構造に即して明示した点は論者の功績と言える。

第二に評価できる点は、懐疑論論駁以外の後期ウィトゲンシュタインの特徴的な論点にも目配りできている点である。第 5 章以下で扱われる規則と行為の関係、原因と根拠の区別、ウィトゲンシュタインにおける基礎付け主義の存否、ヒュームとの類似といった論点は、それ自体興味深く、本論文の議論に広がりを与えている。

第三に評価できる点は、みずからの解釈を打ち出す前提として、複数の先行研究を参照してウィトゲンシュタイン研究の現在の水準をよく踏まえた点である。邦訳のない 5 つの研究を取り上げて対照する作業は、比較の論点を適切に設定したと相まって、手際よく的確に進められている。

以上は本論文に関して評価できる点であるが、批判すべき点もある。第一に、言語ゲームの二層の構造に由来する論理的な確実さと、社会的習慣付けがもたらす確実さとの関係が完全には分明でない。第二に、ドイツ語および英語からの翻訳に改良の余地がある。だが、これらはいずれも今後の研鑽によって十分克服可能な瑕疵であって、本論文全体の価値を損なうものではないと判断される。

以上により、審査委員は全員一致して、本論文が博士（文学）の学位を与えるのにふさわしいものと判定した。